月見丘分会 かつての同志が各地から

森田前組合長の定年退職を祝い 三池闘争25周年を語る会

月見丘地域分会と主婦会は、今年一月二十三日に定年退職された前三池労組組合長・森田満明氏の定年を祝い、あわせて三池闘争二十五周年を語ろうと、各地に散らばっている仲間に呼びかけ、三月三日から四日にかけて立願寺『ホテル・タマナ』で集会を開いた。

この日を待ちかねたように、地元はもとより千葉、神戸、島原、都城、名古屋、糸島郡、太宰府、岸和田、枚方、嘉穂郡からぞくぞく駆けつけ、ロビーでしびれるように手を握りしめ、肩を叩き合い二十五年の再会を喜び合った。

おかげでロビーで受け付けにあたる実行委員も〝天手古舞い〟。たちまち総勢五十四人となる。一応各部屋に落ち着き、入湯のあと五時半からいよいよ開会……。

集会は、物故者の冥福を祈る黙禱ではじまった。映のうらを今は亡き仲間たちのあの顔この顔が去来して無量の感にうたれる。

続いて地域分会、主婦会を代表して小柳分会長があいさつ。実行委員長（高椋氏）のあいさつ。参加者代表（藤田靖利氏）のあいさつのあと祝電披露と続き、森田前組合長へ記念品、奥さんへ花束が万雷の拍手の中で贈られる。謝辞では、さすが三池闘争の先頭に立ってたたかった猛者も感激のあまり涙ぐむ場面もあり、一同ほろりとさせられる。

このあと実行委員長の音頭で乾杯、第二部の祝宴となる。飲むことよりも積もり積もった話、話、話に身がおのずとはいる。〝光陰矢の如し〟の諺どおりあれから二十五年。まさに血のにじむ思いの二十五年の一年一年の歳月の重みが一言一言に実感として伝わってくる。耐え抜き、生き抜き、ただかい抜いた二十五年の自信が明るい笑い声となって響き合う。

やがて舞台では、谷口ちゃんが例の〝早変わり〟で少女のように弾みながら踊りまくる。赤松幸子さんの踊りも本格的で素晴らしく目を奪う。いつか森田さんが歌い出し、下川保しゃんが『上野駅から』を踊り出すと、どっと会場から拍手がわく。宴も最高潮となり、時の過ぎるのもうち忘れ、場内は熱気でわきにわく。三池労組中でも、ここだけしかないという『月見丘分会の歌』を全員スクラム組んで歌っておひらきとなる。

それぞれの部屋にもどってからも、尽きぬ話に花を咲かせたことはもちろんであるが、とくに主婦会は各班毎に集まり語り明かし、その目は泣き笑いを物語るように赤くなっていた。

月見丘分会から二人の組合長を出した輝かしい伝統を今後も守りながら、相互の連帯をさらに深め、再会を約しながら、翌日尽きぬ別れを惜しみながらそれぞれの地へと別れて行った。

（高椋龍生・記）

× ×

月見丘地域分会は大牟田市勝立社宅で現在は笹原校区分会です。

記念品と花束贈呈

一堂に会して記念撮影

月見ケ丘分会の歌を熱唱

三池炭鉱の歴史の中から

三池炭鉱の遺失物

その四 第四回

十五分会 武松輝男

「坑夫ノ品性ノ向上著シク、彼等ノ住居ヲ納屋ト称セラルルコトヲ嫌ウ傾向アリ、募集上ニモ多少ノ関係アリテ、元来、納屋ナルモノハ人間ノ居住スベキ建物ニハ無ク……」

この文章は、三池炭鉱が職制を対象に発行していた昭和四十年六月発行の『三池時報』での三池炭鉱むかし話、社宅の移り変わりの中で、納屋を長屋という呼び方に変える理由のひとつに述べているものである。

長屋という呼び名に変えたのは大正六年であるが、その当時の、三池炭鉱ですら認めている人間が住むようなものではないという納屋というのは、いったいどれほどの広さをもっていたのだろう。

史、資料によると、一戸の広さは四畳から六畳一間に、畳二枚分ぐらいの土間がくっついているだけのもので、流し台もカマドも備わっていないものであった。これではどう考えても人間が住むような建物とは言えるはずもない。

これをその当時の、最下級の職制の社宅と比べてみるともっとはっきりする。職制の住居は長屋と言わないで社宅と言っていたが、およそ十四坪もあった。六畳二間に三畳一間の畳の部屋に、生活に必要な流し台もカマドも備わっている。

長屋に流し台やカマドが備えつけられたのは、呼び名を変えてからおよそ二年あとぐらいからであるから、炭鉱労働者への処遇がいかにひどいものであったかがわかってもらえるだろう。

この長屋が、職制と同じように社宅と呼ばれるようになったのは大正九年からである。しかし、長屋のときもそうであったが、社宅の場合も、ただ呼び方を変えただけであった。

実際に、十戸建ての棟屋を五戸建てにするなどの改造で、部屋数が四畳半に五畳とか六畳とかの新しい部屋を増やしたのは四年あとの大正十三年ぐらいからである。

記録によれば、大正十三年十月十七日現在で、三池炭鉱坑夫社宅戸数は千五百四十戸。炭鉱労働者がおよそ一万三千人とあるから、社宅入居はまさに〝高嶺の花〟。

この〝高嶺の花〟をうまく利用して従業者管理の方策をつくりあげたのが深川労務政策であった。

三池炭鉱の末端職制のことを小頭と言っていたが、坑夫社宅にくらべ二・八倍もの広さをもった職制社宅を材料のひとつに競争をあおっている。

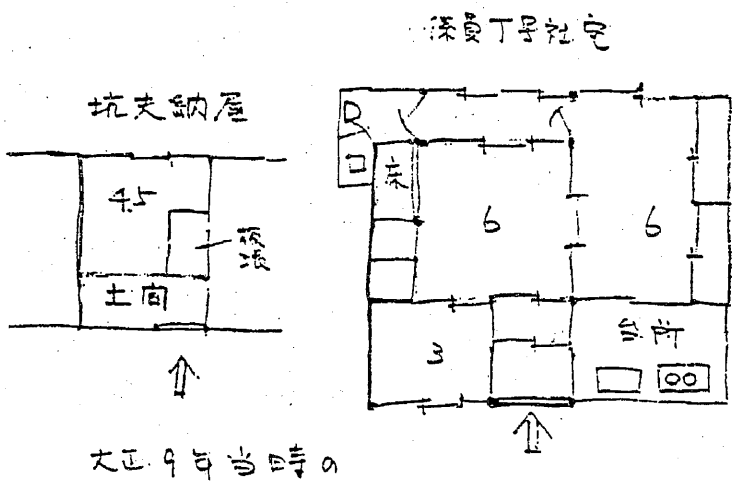
小頭になるには〝ゴマすり〟が要る。昇格試験はあったが、それは形式的なもので、白紙の答案を提出したにしても幹部の〝眼鏡〟にかなった者は昇格した。だから〝ゴマすり〟は大切であるという気風を生む。このことを〝金玉握り〟とも言っていた。

経験者が酒の席で漏らすことを聞くと、〝金玉握り〟は難事だと言う。強く握りすぎると痛いから蹴られるし、緩く握ると擦り抜けてしまう。だから強くなく緩くなく、ほどよく握るのがコツだという。その種明かしをしてはもらえなかったが、そういう人間の卑屈な屈み腰の背後に、狭い部屋を並べた棟割り社宅から眺めた小頭社宅の広い住いがあった。

まるで御殿を思わせるその社宅へ、どれだけの労働者が生活を削って貢ぎ物を届けたことか。あるいは無償の労力を提供したことか。

壁がはげ、壁板が落ちかかった棟割り社宅を見るたびに、かつての労働者の苦渋が甦えってくる。

（カットも筆者）



英炭鉱ストは中止

閉山反対闘争は続行

石炭庁の閉山・解雇計画に反対して一年近くもストライキを続けていた英炭鉱労組（十八万五千人）は三日、特別代議員会議で閉山条件やスト中に解雇された七百人余の組合員の処遇など、石炭庁と合意をみないままストを中止し、五日、集団的、組織的に職場復帰することを決めました。

スカーギル同労組委員長は「ストは終わったが閉山反対、雇用確保のたたかいは続く」と語ったと伝えられています。

このストによる損失は、日本円で一兆円以上といわれ、一万人の警官を動員、組合員九千人が逮捕され、数人の死者を出すなどの長期の大ストとなりましたが、サッチャー政権の超緊縮・高失業放任政治を進める強硬な政策と態度が争議を長びかせたものです。

二十の炭鉱を閉鎖し、二万人を解雇する石炭庁の計画に反対するたたかいは粘り強く続きましたが、生産性の高い地区の五万人は最初からストに加わらず、その後も復帰者に報奨金を与えるなどの切り崩しを強行、ここでも賃金や格差などによる分裂は克服されず、結果的に困難なたたかいを強いられることになりました。

四面のこたえ 七つのまちがい

右の雲、左の山、お地蔵さん、女の子の水筒のひも、右の鳩、左のチューリップ、男の子の口、の七つです。

三池闘争から25年

原稿募集

情熱を燃やし、激しくたたかわれた『三池闘争』からすでに半世紀、二十五周年を迎えました。

国際石油資本の日本へのなだり込みを契機に、石炭産業は構造的危機に直面し〝エネルギー革命〟の名によるスクラップ・アンド・ビルド政策の強行という背景のもとで、資本は人員整理を中心とする全面的合理化を開始し、三池は全国の労働者の支援を得て労働運動史上に特筆されるたたかいに立ち上り、日米安保条約に反対するたたかいとも結んで、果敢にたたかったもののついに勝利することはできませんでした。

その後の三池と炭鉱労働者は、苦難の道程を歩むことになりましたが、社会情勢も労働運動も大きく変貌をとげています。

三池で燃やしたたたかいの焔はなんだったのでしょうか。そしてそれぞれの生きざまは…。

この機会に二十五年目に語る経験と教訓を今日的な視点でとらえかえすために、みなさんのご投稿を募ります。

▼…形式、内容はとくに定めませんが、千二百字以内。

▼…本紙の読者であればどなたでも投稿できます。また、三池闘争にかかわった多くの皆さんからの投稿をお待ちします。